



ゲーグル社のAlpha Goがトップクラスの囲碁名人に勝ったことが大きなニュースになりました。脳科学と人工知能の進歩は、心の科学としてはいわば現象的な発展。心理学にはさらに原理的な貢献が求められていると思います。

## ■ ■ ■ 今号のおもな記事 ■ ■ ■

- ・催し物の予告
- ・教養講座要旨
- ・犯罪心理学の窓から
- ・戸山キャンパス昨今
- ・会員の活動
- ・エッセイ

## 催し物の予告

### 1. 2016年度 公開講演会

演者 柴田重信先生

早大・理工学術院教授／

先端生命医科学センター

タイトル 生体リズムに基づいた健康法

日時 2016年6月18日(土)

15:00-17:00

場所 戸山キャンパス453教室 (予定)

### 2. 春期教養講座

講師: 藤本 靖氏

タイトル: センスを磨くのに努力はいらない

—ココロとカラダの悩みを解決する—

ボディワークの実践を通して学ぶ。

日時: 2016年5月28日(土)

15:00-17:00(質疑応答を含む)

場所: 大隈ガーデンホール

(大隈講堂脇、大隈ガーデンハウス1階)

※ヨーガマット利用

### 3. 秋期教養講座

講師: 富田 真紀氏

(台東区松が谷福祉会館こども療育室)

タイトル: 発達障害と心の理論(仮題)

日時: 2016年10~11月の土曜日

場所: 戸山キャンパス

## 教養講座要旨

2015年11月14日

## アドラー心理学入門

— 劣等感 / ライフスタイル / 勇気づけ —

向後 千春

早稲田大学人間科学学術院教授



## アドラー心理学の概要

アルフレッド・アドラーは、ジークムント・フロイト、カール・グスタフ・ユングと並び、臨床心理学の基礎を築いた。

アドラー心理学は、その特徴から別名を個人心理学ともいう。これは「個人は分割できない統一体であり、全体としてその人自身の人生を決めている」という特徴を表している。

アドラー心理学の理論は、5つの基本前提によって成立する。(1)「人は目的のために行動する」目的論、(2)「人は個人として一貫している」全体論、(3)「人は社会に埋め込まれている(対人関係の中で生きている)」社会統合論(対人関係論)、(4)「人は世界を(自分の)見たいように見る」仮想論(認知論)、(5)「人は自分の人生を自分で決める」個人の主体性、これら5つの理論である。

そして、これらの理論を用いて、アドラー心理学が強く主張するところ、それは、「人は誰でも理想の自己像を持ち、現状との落差から劣等感を感じている。そのような不完全な状態にあることを互いに認め合い、協力し合いながら人生の課題に向き合う」というものだ。

## 劣等感

人は誰でも理想の自己像を持っていると既述した。自分のイメージするその理想と比べれば、現状はそれに劣る状態であるため、そこで自然と自分に対する劣等感が生じる。つまり、劣等感とは理想を果たす過程において生じるフィーリングであり、今より良い状態を目指す証である。重要であるのは、他人との比較においてではなく、自分に対して感じるという点だ。

どこに劣等感を抱くかは人それぞれである。例えば、容姿などの身体的特徴(器官劣等性)や、足が遅かったり学力の差など(運動能力や知的能力の劣等性)、あるいは社交性など(情動的能力の劣等性)が挙げられるだろう。劣等感とは、周囲と比べて生じるものではなく、自分のここが人より劣っているという、個人の問題意識によって喚起されるものである。

私たちがこの劣等感に直面したとき、2つの選択をすることができる。1つめは、直面した課題にぶつかっていくことだ。課題にぶつかっていけば、自分のイメージする理想に近づくことができる。それを私たちは成長と呼んでいる。もう1つは、劣等感をいいわけにして、直面した課題から逃れようとする。これを劣等コンプレックスと呼ぶ。こうして課題から逃げれば、失敗することはない。そのかわりに、いつまでもその課題は解決せず手つかずのままである。私たちはまず、100%パーフェクト(理想)ではない自分、不完全である自分を認め、目の前の課題を1つひとつのりこえることでしか、自分の理想には近づく方法はないのである。

## ライフスタイル

課題をのりこえる方法、すなわち劣等感をどのように補償するかは、それぞれの個性があり、アドラー心理学ではそれを「ライフスタイル」という。劣等感あるいは直面した課題に対し、どのように補償していくかの決断を積み重ねることで、その個人独特の補償の仕方、つまり、生き方でありライフスタイルが形成されていくのだとアドラーは考えた。

このライフスタイルは、現代心理学用語の「性格」や「人格」に対応する概念とも考えられる。ここではさらに広義に、その人の人生を貫き通す、個人独特の生き方だと解釈する。また、性格が「遺伝×環境」の組み合わせで決まるのに対して、ライフスタイルは、加えて、最終的な個人の決断によって決められていく。アドラー心理学においては、ライフスタイルは「遺伝×環境×個人の決断」の組み合わせで決まるということが出来るだろう。

このようにして形成されたライフスタイルは、いわば人生の設計図のようなものであるから、人それぞれ独自のものとなる。とはいっても、概観すれば、特徴ごとに4つのカテゴリーに分類することができる。そこで、最優先目標(Kefir 1971; 中島・鎌田 1998)による分類を紹介しよう。

「最優先目標」とは、課題に直面するとき、どのような目標を最優先にして解決しようとするか、という点に注目する方法だ。ライフスタイルは、「最優先目標」によってA・B・C・Dの4つの型に分類することができる。

まず、2つの軸に分ける。1つめの軸は「対人関係重視 / 課題達成重視」の軸である。もう1つの軸は「受動的 / 能動的」の軸だ。「誰と一緒にするか」を重要視する人(対人関係重視)、「課題をやり遂げること」を重要視する人(課題達成重視)、そして、「自ら積極的に行動」するのか、「反応するだけの受け身」であるのか、この2つの軸の組み合わせで分類している(図1)。

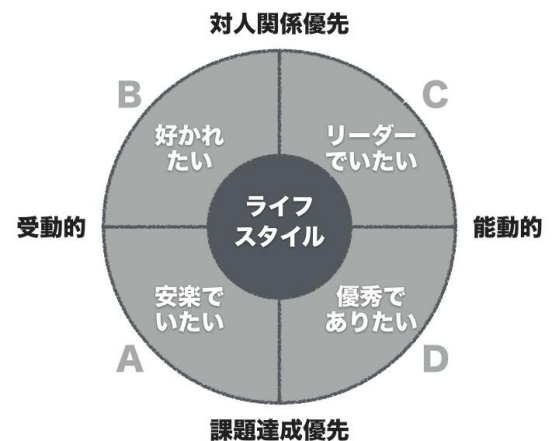


図1. 最優先目標によるライフスタイル

A(課題達成重視・受動的)は「安楽でいたい」と願い、苦勞することは苦手と避けようとする。B(対人関係重視・受動的)は「(みんなに)好かれたたい」と願い、除け者にされることが嫌で、それを避けるために周囲にサービスを施す。C(対人関係重視・能動的)は「主導権をとりたい」と願っており、他者に服従することは我慢できない。D(課題達成重視・能動的)は「優秀でありたい」と願うので、常に人一倍の努力をしている。

それぞれこのような「最優先目標」を有している(図2)。

	A	B	C	D
最優先目標	安楽でいたい	好かれたい	リーダーでいたい	優秀でありたい
苦手なこと	苦勞すること	のけものにされること	服従すること	無意味な時間
苦手なことを避ける方法	一番安楽な道を選ぶ	他の人を喜ばせる	他の人をコントロールする	人一倍努力する
強み(資産)	気楽さ	親密さ	リーダーシップ	なんでもできる
弱み(負債)	成長がない	自分がない	かたくな	背負いすぎる
まわりの人が抱く印象	いらいらする	信用できない	反発する	劣等感を感じる
愛用する感情	面倒くさい	不安	怒り	憂うつ
理想状態	私は面倒をみられるべきだ	私は愛されるべきだ	私は上に立つべきだ	私は成功するべきだ

図2. 4つのライフスタイルの特徴

それぞれの特徴には、強みと弱みのどちらも存在する。したがって、どのタイプが良い、そのタイプが悪いということはない。周りの人たちがそして自分を、ライフスタイルの枠組みの中で捉えるようになると、人はそれぞれ違ったライフスタイルを持って生きていることがわかるだろう。相手と自分のライフスタイルを知り、互いに違って当然だと認識することが重要なのである。その違いを受け入れ、協力し合うことで、良い人間関係をつくることができる。

## 勇気づけ

アドラー心理学の考える良い人間関係とは、対等な関係のことである。これを「ヨコの関係」と呼ぶ。これは、親と子、上司と部下、先生と生徒、いかなる立場においても対等であるということだ。「ヨコの関係」とをれば、それぞれの担う役割が異なるだけであって、人としては対等であることがわかる。

一方で、どちらかが上で、どちらかが下であるような関係は「タテの関係」である。私たちは意識せずとも、相手との優劣をつけ権力闘争を試みる。「タテの関係」になって、相手をコントロールしようとする。私たちが、普段から相手をほめたり叱ったりしていることも、実は、相手をコントロールするために便利であるからだと気づいているだろうか。

ほめたり叱ったりすることは、即効性があるので、私たちはつい多用してしまう。相手もほめられれば嬉しくなって、すぐに行動につながるだろう。しかし、次第にほめなければ何も行動しなくなる。叱られれば落ち込み、相手のためであることをどんなに主張しても、心にわだかまりを残す。次第に相手は何か挑戦することを恐れるようになってしまう。つまり、ほめたり叱ったりすることは、相手に対して効果的なのではなく、自分に対してのみ効果的なのだ。

真に相手との関係を考えるのであれば、必要なのは相手への「勇気づけ」だろう。「勇気づけ」は、これまでの過程に注目し、失敗からも成功からも学ぶことができた相手の成長に注目することである。そして、相手の良い意図を汲み、その協力と貢献に感謝を伝えることである。この「勇気づけ」という方法をとることで、相手の自立・挑戦・協力を手助けすることができる。相手と「ヨコの関係」であることを望むならば、「勇気づけ」をおすすめする。人は、「勇気づけ」てもらふことで、「自分には能力がある」「まわりの人びとは仲間だ」というメッセージを受け取り、それは「ヨコの関係」をつなぐ絆となるのである。

## あなたが決める

本講演の中で、アドラー心理学が提唱する人生の見方・考え方について述べた。要するにそれは、以下の3点に集約することができる。

(1)劣等感とは、100%パーフェクト(理想)ではない不完全な自分が、理想の自分に抱く感情である。

(2)個人独特の劣等感の補償の仕方や生き方を、ライフスタイルと呼ぶ。

(3)ライフスタイルの違いを互いに認め合いながら、協力し合うことのできるヨコの関係を作ろう。そのためには、相手をほめることや叱ることに代わり、勇気づけることが有効である。

これらは、あなたがこれまでに触れてきた見方や考え方とは異なるかもしれない。当然のことながら、アドラー心理学が提唱するそれが、必ずしも真理であるということではない。ただ1つの新しい見方を提示したに過ぎないのである。

このようなアドラー心理学の見方や考え方は、現実の日々を生きる私たちに、生きることについてのシンプルで力強い全体像を与えてくれるだろう。もし、あなたがこれを採用し実践してみて、上手いきそうだと思えば、選択すればよい。あなたの考え方や生き方は、あなた自身が主体性をもって決断する以外にないのである。



## 少年法の適用年齢論議をめぐって

藤野京子

文学学術院教授

第一文学部心理学卒(1984年)

昨年6月の公職選挙法の改正により、選挙権年齢が20歳以上から18歳以上に引き下げられた。大学生は全有権者となり、早速、今夏の参院選で適用されることになる。この改正の附則11条「民法、少年法その他の法令の規定について検討を加え、必要な法制上の措置を講ずる」を受けて、民法の成年年齢も20歳から18歳に引き下げることに向けた具体的な準備が進められ、少年法の適用対象年齢についても、同様の引き下げが適当かどうかの検討が求められている。そこで、昨年末からは、法務省内でも「若年者に対する刑事法制の在り方に関する勉強会」が開催されている。

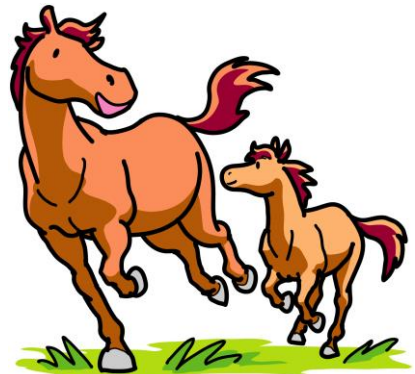
国法上の統一性や分かりやすさの観点から、さらに、権利があるからには責任もあるはず、つまり権利の保障と責任の取り方は表裏一体の関係にあるからとの法的整合性の考えが、この附則の意味するところであろう。なるほど「成人になって選挙などの権利が与えられるのだから、成人として犯罪などの責任も負うべきである」はわかりやすい。加えて、グローバル化が加速している昨今、世界の多くの国が少年年齢を18歳に規定していることを踏まえて、国際水準に合わせるのはいいことかもしれない。しかし、この「18歳」の適否について、行動科学の分野においてなんらかの知見が得られているのであろうか。

「一般的な18歳の人」を想定して、法律は年齢を規定しているのであろう。確かに、個人差を考えるとときりがない。とはいえ、多くの非行少年に会ってきた筆者の経験からすると、18,19歳の非行少年はきわめて未熟である。資質面や環境面で様々なハンディを抱えて、家庭や学校をはじめ社会に適応できていないと感じながら生活している。努力したり一時期我慢したりすれば、その先に彼らが待ち望む何かを得ることができる。希望的観測を抱けないまま日々を過ごしている。したがって、自身を取り巻く社会に対して責任ある行動をとって社会適応していこうとの認識に至ることができずにいる。

少年に対する保護処分とは、上記のような少年に対して教育的働きかけをすることで、社会のしっかりとした構成メンバーになることを促すものである。そこで、処遇の基本は、社会適応するかどうかのようによいかを意識化させて、やっていけないとされていることをすることの意味や結果を理解させ、さらには、社会的不適応の原因を取り除いたり軽減したりするよう働きかけて、「社会適応できる」という自覚を促すことに置かれている。

その処遇は、処遇する側の一人ずもうでは効をなさない。彼らは「社会でやってはいけなさとされている」と知りながら、「彼らなりの判断」に基づいて行動選択している。したがって、社会の論理、大人の論理を一方的に説諭したところで、馬耳東風である。彼らの感じている生きづらさを語ってもらい、それを教育者が一緒に紐解いていくという対話を交えた少年と教育者との共同作業でないと効果がない。こうしたやりとりこそが教育者への信頼を培い、それがひいては社会への信頼に通じ、やっていけないことの意味を深く理解していくことにつながる。それと同時に、そのような社会に適応していきたいとの意欲の喚起や、自身も社会適応できるという希望につながる。

このような教育的働きかけを刑事施設で実施することは可能であろうか？ 明治時代に制定された監獄法が廃止され、刑事収容施設及び被収容者等の処遇に関する法律が施行されて今年で10年が経過する。この間、同法律のもと、受刑者に対し、犯罪の責任を自覚させ、健康な心身を培わせ、並びに社会生活に適応するのに必要な知識及び生活態度を習得させるために必要な改善指導の充実が図られてきたことは事実である。しかし、刑事施設は、そもそも罰を科すことを主とする施設であって、そこで過ごす時間の大半は刑務作業にあてられる。つまり、改善指導に割かれるのはごく一部に過ぎない。一方、保護処分である少年院での教育は、生活の全てにわたって彼らの内面の変革に働きかけるものである。



罰を与えることで犯罪が抑止されるならば、事は簡単である。しかし、厳しさに耐えうるほどの強い自我が育まれていない彼らは、厳しい現実をつきつけられると、自分など生きていてもしょうがない、死んでもいいなどと反応してくる。彼らは、そもそも自分を含めて人を大切にすることがどういうことかを学べていないため、人に危害を及ぼすのである。実際、海外には刑罰化・厳罰化が再犯防止に逆効果であるというエビデンスも存在する。

ニュースで少年による凶悪事件が報道されると、保護処分で少年を甘やかすなど叫ばれる。メディアで取り上げられると、少年犯罪が頻発しており、どうにかしなければ・・と誤認されがちだが、そもそもニュースとは、稀有なことだからこそ報道されるのである。実際、公式統計は少年による犯罪件数の減少を示している。犯罪対策は応報のみで十分であると考えてるのであれば仕方がないが、犯罪抑止を視野に入れるのであれば、上述したような実態を踏まえる必要がある。犯罪をしたことで施設に収容されても、それは一時期の社会からの隔離に過ぎず、いずれ彼らは一般社会に戻ってくる。その際、彼らが社会の全うな一員として振舞いたい、あるいは振舞えると思えないならば、我々も安心して日々の生活を送ることができない現実がある。

冒頭で言及した勉強会が少年ではなく若年者を対象としている意図は、少年に対して従前行われてきた働きかけを青年にまで広げることの是非についても検討していこうとするものなのであろう。もし青年層を設けるとして、法律で定めるその年齢をどのように定めるのが適当かということについて、行動科学の分野からなんらかの提言ができるであろうか。2020年の東京オリンピックに向けて安心安全な国作りが目指されているが、行動科学の知見がどのように貢献できるかを今一度考えてほしい。

## 戸山キャンパス昨今

### タイサンボク—卒業して50年—

—文哲学科心理学専修1966年卒クラス会  
(文責:西本武彦)

文学部のスロープを登り切る少し手前、左側に大きなタイサンボクの樹がある。このタイサンボクは50年前の昭和41年(1966年)春、われわれが卒業するときには植樹したものである。文学部が本部キャンパスから戸山キャンパス新校舎に移転したのが昭和37年。新校舎の一期生だったが、記念会堂での卒業式はなかった。前年末から大学紛争が始まり、年明け1月から全学スト、2月本部封鎖、機動隊が導入されて200名以上の検挙者という騒然とした状況(いわゆる第一次早稲田闘争)の中で学園を巣立つことになった。

多士済々、同級生46名の結束は固く、文学部で学び心理学教室に籍をおいた4年間を植樹という形で残したいと思い、当時まだ殺風景なスロープ脇に何本かの苗木を植えた。植樹式の写真には故人となられた戸川行男先生(白髪の後ろ姿)や本明寛先生、富田正利先生の姿も写っている。当時の苗木はいま、幹の太さ40センチ以上、高さは7メートルを超えるまでに育った。春になると隣の桜と並んでスロープを彩っているが、その謂われを知る人はほとんどいない。



卒業時の植樹式  
(1966年3月)



現在のタイサンボク  
(2015年10月)

卒業してからもクラス会を、ほぼ毎年開いてきた。1人ももらすことなくクラス全員の名簿を常に更新しているのが自慢である。日米宇宙中継の最初の映像がケネディ大統領暗殺(昭和38年)、翌年は東京オリンピック、相撲は大鵬vs柏戸の世代だから、積み重ねた50年は立派な歴史であろう。

言われるまでもなく古稀をすぎて、そろそろ骨董品に近づいてきた。折しも大学主催のホームカミングデーの知らせが来たので、それに合わせてキャンパスツアーを兼ねたクラス会を開くことを決め、昨年10月18日(日)に集まった。当日は天気にも恵まれ、大隈ガーデンハウス3階のカフェテリアで旨いランチを食べ、エスカレーター付き高層校舎が立ち並ぶキャンパスに驚き、演劇博物館や中央図書館で母校の伝統を再認識して、昼の部を賑やかに過ごした。歓談しながら、時の話題のマンション杭打ち偽装が、いつのまにかインプラントの話になって大笑い。やはり歳はあらそえない。



夕方は高田馬場駅前の昔懐かしい「文流」に集い、イタリア料理とワインで、一瞬にして学生時代に戻った。こうしてクラス会が連綿とつづいているのは、秋山胖君(文教大学名誉教授)の力に負うところが大きい。クラス全員が敬愛する親分であり現在、福島のいわき市に居を移し、被災地でボランティア活動をしている。そして、なんと言っても強烈女性軍を抜きにしてクラス会は存在しない。早稲田はワセ女でもっている、その通りである。

かつて学んだ文学部校舎はリニューアルされ、国連ビルとよばれた研究棟も新しく立派になり、記念会堂も解体・新築工事の真っ最中である。ホームカミングデーに合わせた今回は、卒業後50年という時の経過を実感したクラス会だった。スロープのタイサンボクがさらに大きく育ち、白い花の下、後輩たちが行き交う光景がこの後もつづいてほしいと願っている。

## 文学部心理学教室・実験室の改装

文学部新研究棟竣工後、文学部校舎は大幅に改装され、新築同様の姿に変わった。2015年春から夏の期間に工事が行われ、2015年9月の授業から文学部校舎全体が通常の形で運用されることになった。

文学部はかつて本部キャンパスの8号館にあり、1962年、大学創立80周年記念事業の一環として、村野藤吾の設計により高等学院の跡地に文学部校舎が新築されたのである。同時に、心理学教室・実験室は、同地の改築された高等学院旧校舎に移転した。1965年3月に卒業した学生が丁度1年生に在学の時である。

研究棟が新築されたのに伴い、文学部校舎が大幅に改装され、心理学教室・実験室は昔の面影をほとんど残していない。

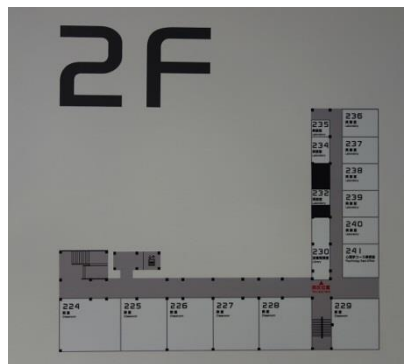
写真Aの扉は2階心理学実験棟入り口部分で、従来の重々しい鉄の扉に取って代わった。左壁「2F」表示で教室配置図が見える。写真Bはその配置図を拡大。右側の上に出た部分は心理学実験棟部分で、右列は均等割りになった心理事務所(手前)・実験室と続き、左列は手前から図書室、倉庫、印刷室、実験室と並んでいる。従来の心理学実験室番号に対応している。写真CとDは、心理学実験棟の3階奥から実験棟入り口方向を見たもので、旧実験室棟(写真C)と新実験室棟(写真D)の様子が比較できる。

機会あればどうぞお立ち寄り下さい。

(文責 石井康智 1970年・文心)



写真A 心理学教室・実験室入口(2階)



写真B 右の上に出た部分が  
2階心理学教室・実験室



写真C 旧実験室  
(3階奥から入口方を見る:  
左手前が331実験室)



写真D 新実験室  
(写真Cと同じ位置から撮る:  
左手前が331実験室で室内  
は小さなブースが6つある)

### 21世紀日本研究セミナー紹介

所 正文

立正大学心理学部教授

第一文学部・心理学専攻卒(1981年)

今から17~8年前になるだろうか？ 早心の石井康智教授が私に「これから老年研究を本格的にやろうとしている所君に良い先輩を紹介するよ」と仰って、東海大学の谷口幸一教授を紹介してくれた。谷口先生は1972年早大・教育心理卒で、その後早心の大学院へ進まれ、20歳代から老年研究の重要性に気づかれ、精力的に研究活動を行っている日本でも有数の老年学者であるとのことであった。介護福祉分野、スポーツ分野での老年研究に関して、とりわけ造詣が深いということも併せて伺った。私自身が「高齢ドライバー研究」を中核に据えて、これから本格的に老年研究を始めようとしていた時であったため、まさに「良い先輩」を石井先生からご紹介頂くことができた。石井先生は私の学生時代には早心の助手をされており、その後も長年にわたり、多くの早心関係者の研究内容や実社会での活動内容を把握され、皆に様々な配慮をなされている。まさに早心の生き字引のような先生である。こうして、私と谷口先生の共同研究はスタートした。



2014年7月  
セミナー後

我々は、早速「早稲田大学心理学会・老年学研究部会」を立ち上げ、活動を開始した。活動の主な舞台は、当時の私の勤務校であった国士舘大学政経学部(東京・世田谷)であり、年6回の研究会を開催した。内容的には、文献講読、調査研究・フィールドワークの紹介などであり、参加者は、東海大学の社会人学生や公開講座参加者が中心であった。早心理事のの中村誠氏も毎回参加して下さった。研究会後の世田谷・松陰神社付近での懇親会、年度末の研究合宿(熱海・山中湖等で毎年実施)も定例化し、楽しみの一つとなった。この研究会の成果として、2冊の調査研究報告書の発刊があげられる(「高齢者の生き方・事例調査」、「10周年記念報告書」)。研究会の主要メンバーが介護福祉系の女性臨床家であったことから、超高齢社会における臨床研究に対する一定の基盤は築けたと言える。しかし、全体を通して、必ずしも満足のいく成果は得られなかった。主な理由は次の2点にあった。

(1)21世紀日本社会において、我々は高齢者だけにしか着目していなかった。人口全体に占める割合に高齢者比率が如何に高くなるとはいえ、そうした社会を若者がどのように生きていくのかといった視点が明らかに欠けていた。

(2)老年研究は、本来広がりを持つものであるが、研究会で取り扱ったテーマが限定されていたため、間口を狭めて必然的に参加者に門を閉ざしてしまった。

こうした問題点を考慮して、第2ディケード(decade)では、新しい形の研究会に再生させる必要があると我々は考えた。そこで、今後将来にわたって、この研究会を発展させていくためにも、主宰者である我々は、日々密に議論を積み重ね、次のような形で進めていくことで合意している。なお、抜本的な変革時期が、私の立正大学心理学部への移籍時期(2011年4月)と重なったため、新セミナーの運営実務に関して、立正大学・所ゼミ学生の大きな協力を得ていることも付記させて頂きたい。

◆研究会名称を「21世紀日本研究セミナー」と変更する。

◆研究セミナーの目的は、世界でも類を見ない超高齢社会に突入している21世紀日本社会を活性化させるための具体的提言を行うこと、及びこの時代を生き抜く現代の若者たちに対して人生上の示唆を与えることにある。

◆学問的立場としては、生活改善や政策提言につながる人間・社会科学的側面からのアプローチを重視する。

◆研究セミナーが取り組む領域として次の4領域を掲げる。各領域において、理論紹介、調査研究報告、及び事例報告を行っていく。

**領域1: 健康・スポーツ系** (担当: 谷口幸一)

【関連分野】 健康心理学、スポーツ科学

【キーワード】 健康寿命、ジェロントロジー・スポーツ

**領域2: 医療福祉・教育系** (担当: 谷口幸一)

【関連分野】 臨床心理学、社会福祉学、精神医学

【キーワード】 認知症介護、介護保険、地域生活支援、エイジング教育

**領域3: 仕事・人生系** (担当: 所 正文)

【関連分野】 産業心理学、生涯発達心理学、人的資源管理論

【キーワード】 キャリアデザイン、雇用と生活、ライフスタイル、家事と育児

**領域4: 交通・生活系** (担当: 所 正文)

【関連分野】 社会心理学、政治・経済学、社会システム工学、生活科学

【キーワード】 車と生活、高齢ドライバー、街づくり、モビリティシステム

◆研究セミナーとして以下のHPを作成し、随時更新していく。 <http://21jps.blogspot.jp/>

4領域それぞれにおいて、HP上への毎月21日コラム掲載を、我々は目標として自らに課し、2015年4月より実施している。

◆研究セミナー開催は、当初4領域がそれぞれ年1回(合計年4回)開催を前提に進め、すでに9回まで到達した。しかし、実施運営の難しさがあり、今後は年前半に領域1・2で合同開催、後半に領域3・4で合同開催(合計年2回)の方向で検討している。

◆今後の課題としては、HPの更なる充実化、そして研究セミナー開催時の工夫が求められている。我々2人は、このセミナーに大きなエネルギーを投入して取り組んでいるが、目下、十分な成果が上がっているとは言えない。今後は多世代を対象にした実践を取り込みながら、老年学の定着を目指した努力を続けていきたいと思っている。

アメリカ便り (1)

黒坂和彦

早稲田大学心理学会・理事  
(早大一文心理1986年卒)

大学卒業後に約29年在籍した会社を退職して1年が過ぎました。この会社では、幸運にも34歳から約7年間、香港に駐在する機会に恵まれました。駐在している間の充実した日々が忘れられず、52歳の時に転職活動を開始し、縁があって、四国に本社のある450名程の会社に、2015年1月に転職しました。四国や東京での勤務を経て、2015年11月下旬にアメリカのニュージャージー州に赴任したばかりです。

オフィスは、同州のフォートリーという街にあり、住宅もほぼ隣接したアパートに決めました。徒歩5分もかからない距離です。フォートリーの人口は約4万人弱で、約2割が韓国系住民です。80年代は日本人の比率の方が多かったそうですが、様変わりしました。それでも、韓国系の飲食店が多い中、ラーメン、そば、すしといった日本食のレストランが点在しています。

車で15分ほどかかりますが、隣の街にはミツワ(旧ヤオハン)という大型の日系スーパーがあり、日本人が生活するには便利なところ。同州には、大型のショッピングモールも多く、ニューヨーク市のマンハッタンより、衣類やブランド品等の買物については、ゆっくり選ぶことができ、環境が良いと思います。また、風光明媚なスポットも多いようです。暖かくなったら、訪ねてみる予定です(今朝は-11℃でまで冷え込みました)。



自宅アパート(左)と  
オフィス(奥の茶色いビル)

ニューヨーク市とフォートリーとは、ハドソン川を挟んで隣接しており、マンハッタンには、バスで乗って1時間程度で到着します。土日にはマンハッタンに出て、これまでミュージカルやスポーツ観戦(WWE)を楽しみました。メトロポリタンやグッゲンハイムといった世界的に有名な美術館もあり、これから時間をかけて観賞したいと考えています。色々な文化に触れることができる環境であり、有難く思っています。

先日、アメリカの最大の書店チェーンである、バーンズ・アンド・ノーブルに、ぶらりと寄ってみました。心理学(Psychology)関連の書籍の取り扱いが、非常に多いのに驚きました。日本の大型書店とは、配分が明らかに違います。書棚4つ程度が心理学の本で占められていました。私は池袋のジュンク堂や、高田馬場の芳林堂に良く行っていました。前の会社で管理部門の仕事に携わっていたので、法律や会計の書棚を中心に見ることが多く、参考になる書籍が数多くありました。

それに比べ、こちらでは、心理学の扱いの方が大きいです。法律関連の書籍の扱いは、心理学の1/4程度でしょうか。現在のアメリカでは、実用的な知識より、人間の心や行動についての関心が高いのではと感じました。ちなみに、哲学(Philosophy)の取り扱いも、心理学とほぼ同様でした。



クリスマス前後のNY  
ロックフェラービル

前述のとおり、私は11月下旬に赴任しましたが、家内が12月下旬に渡米し、身の回りの世話をしてもらえる状況になりました。23歳と19歳の娘はもう大人ですから、日本に置いてきましたが、ライン等でコミュニケーションを図っています。現地に早くなじめるように、家内を色々なお店に連れてっています。総じて外食は量が多く、この前のランチは、二人で分けました。コーラも量が多いので、分けました。自動車やバスでの移動が多く、歩く機会が少なくなりましたので、健康維持のため、アパートにあるジムで、今のところ毎日汗をかいています。

それでは、次の機会に、こちらの様子を、また報告させていただきます。 2016年1月5日 記

寄付のお願い

御厚志をお受けします

銀行名: ゆうちょ銀行  
ゼロイチキョウ

支店名: 〇一九(支店) ※漢数字で表記  
種別: 当座預金

口座番号: 0584416

口座名義: 早稲田大学心理学会

発行元: 早稲田大学心理学会

〒162-8644 新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部心理学教室内

電話 03-5286-3743 FAX 5286-3759

担当: 石井康智

メール: waseda\_shinri@yahoo.co.jp

担当: 朝岡美好

書類発送元:

一般社団法人学会支援機構

〒112-0012 文京区大塚5-3-13

小石川アーバン4F

電話 03-5981-6011 FAX 5981-6012

早稲田大学心理学会ホームページ:

<http://www.waseda.jp/assoc-wpa/>